第２学年生活科の実践

１．単元名「みんなでいこうよ　つかおうよ」

２．単元目標

・ 身近な公共施設へ行き，安全に気をつけて施設を利用する活動を通して，公共施設やそこにある公共物はみんなで使うものであることや，それらを支えている人々がいることが分かり，大切に使ったり，安全に気をつけて正しく利用したりすることができる。

生活への関心・意欲・態度	活動や体験についての思考・表現	身近な環境や自分についての気づき
身近な公共施設に関心をもち，安全に気をつけて利用したり，施設を支える人々とかかわったりしようとしている。	公共施設が，みんなで使うものであることや，それを支えている人々がいることについて，自分なりに考えたり，振り返ったりして，それをすなおに表現している。	公共施設には，みんなが気持ちよく利用するためのルールやマナーがあることや，施設を支えている人々がいることなどが分かるとともに，公共施設を利用すると自分たちの生活が楽しく豊かになることに気付いている。

３．ひびきあう子どもたちをめざすための指導の工夫

（１）単元と指導

①単元について

本単元は，学習指導要領の内容（４）公共物や公共施設を利用し，身の回りにはみんなで使うものがあることやそれを支えている人々がいることなどが分かり，それらを大切にし，安全に気を付けて正しく利用することができるようにする。と（８）「自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を行い、身近な人々とかかわることの楽しさが分かり、進んで交流することができるようにする。」に基づいて設定した。

本単元では、春の学区探検を受けて、学校から地域へ視野を広げ，子ども自ら計画を立て，公共施設と何度もかかわる活動を行った。具体的には学区にある市立図書館から公共交通機関を使って小田原市で一番大きい図書館であるかもめ図書館にいく活動を通して，公共施設に親しみを抱いて生活を工夫したり楽しくしたりしようとする意欲を喚起できるのではないか。そして公共施設（城趾公園，御幸が浜・図書館など）や公共物は，町のみんなのものであることやそれを支えている人々がいることを知り，それらを大切にしながら積極的に有効利用し，自分自身の生活を広げ，豊かにしていくことにつながると考えた。さらに，公共施設を公共交通機関で探検し，人や場所とかかわる体験を繰り返すことでそれに対する気付きや思いに深まりが見られ，地域に対する愛着を持つことができるのではないかと考えた。

②豊かな体験を基盤とした表現活動について

私自身，小さい頃から心に残っていることは何だろうと考えると，やはり体験して満足した時のことをよく覚えている。生活科でも同じことがいえるだろう。普段出来ない体験を何回も繰り返し行ったり，子どもたちが何気なく発した一言のすばらしさを認め共有したりして，授業に取り入れていくことが必要である。

また，子どもたちはうれしい体験をした時は「先生あのね!!」と他の人に自分の考えを言いたくなる気持ちがうまれると思う。しかしせっかくのすばらしい体験を教えようとしてもうまく伝わらなければ相手の気持ちの共有も行われない。そこで「誰に」伝えるか，相手にあわせて「どのように」つたえたいのかを考えられるようにする必要がある。そして，お互いを客観的に見合い，発表に向けて自分の思いをもつ機会を授業の中で確保していきたい。そのことがよりよいコミュニケーションになり，情報交換をし，互いの交流を豊かにすると考える。場合によっては教師が助言することで交流のきっかけが生まれると思うので，グループ活動などの話し合いにおいては相づちや表情に表すなどをしてコミュニケーションの場を活性化するように意識をした。

③ひびきあいについて

生活科では『かかわり合うことで，「発見・驚き」「共感」を得，さらに自分の思いや考えを重ね，表現しながら高まっていく。』ことをひびき合いととらえている。そこで，具体的な活動や直接体験を中心とした学習活動を工夫していき、子どもが主体的に学習や生活に取り組めるようにしていきたいと考えている。本単元では、指導計画にあるような具体的な活動や直接体験となる活動を取り入れることにした。今回はグループ活動を中心に，子どもたち自身が計画を練っていく場面で，または，学級全体での話し合いの場面でのひびきあいが期待されると考えている。そこで，本単元の指導にあたっては，子ども一人一人の考えを認めながら，発表を聞く相手を意識して，よく分かるまとめ方が工夫できるように言葉かけをするとともに，友達の発表から自分の気付きを深めていくことができるように心がけた。

ひびきあいについては、聞いて欲しいという児童一人ひとりの思いを大切にしながら、話し合いの基礎である、「聞き方」「伝え方」を生活科でも身につけていきたいと考えている。そこで、一人ひとりが自分の思い

をもつ・グループの友だちに伝える・学級の全体に伝えるというような段階を踏みながら響き合いを広げていきたい。自信をもって活動できる、話し合いの手順も具体的に示していく必要があると考えている。また、話し合いの問題については、「ひとつに絞ること」と「具体的で分かりやすいもの」を設定していきたい。また、（８）「自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を行い、身近な人々とかかわることの楽しさが分かり、進んで交流することができるようにする。」の内容を受け、交流の場を多く設定していきたい。そこでは、言葉を中心にした伝え合う活動を活発に行えるようにするだけではなく、表情やしぐさ、態度などで伝えることも大切にしていった。

４．単元指導計画（全１２時間）

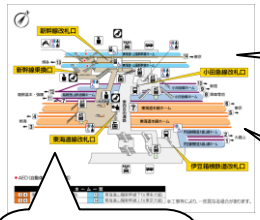
時数	活動のねらい	活動のながれ	指導・支援	評価規準の具体例
1	違う地域の公共物や公共施設に興味を持つ	① 「まちたんけん」や「わくわくハイク」をきっかけに、自分たちとは違う地域の公共物や公共施設に関心を持たせる。 ② そこに行ってみたいという気持ちが持てるように、楽しかったことや不思議に思ったことを発言させる。	・ どの子も経験した「まちたんけん」や「わくわくハイク」からほかの地域にも行ってみたいという気持ちを持たせる。 ・ 「動くおもちゃ作り」での本を調べてみたいう気持ちから、図書館の存在を意識できるよう導く。	・ 地域の図書館で借りたい本について発言しながら、図書館に行く計画を立てる。［関・意・態］
3	**図書かんへ 行こう** ○図書館へ行き，安全やマナーに気をつけて，本を読んだり，探したり，借りたりして利用することを通して，その場所は，自分たちだけでなく，さまざまな人が使う公共の場所であることに気付くとともに，施設を安全に，正しく利用する方法などが分かる。	① 職員の方などに教えてもらいながら，本を借りるなど，実際に図書館を利用する。 ② 図書館を利用したことを振り返りながら，見てきたこと，気付いたことなどを伝え合う。 ③ 図書館で働いている人やボランティアの人，利用者などにインタビューする。	・ 他教科等や他単元と関連させ，「学校の図書館と比べるため」「自分たちが調べたり読んだりしたい本を探しに行くため」など，児童に図書館に行く必要性がうまれるようにする。 ・ 施設の職員だけでなく，利用者やボランティア活動をしている人にもかかわることができるよう，時間帯や活動時期を考慮する。 ・ 気付いたこと，感じたことなどを振り返り，友達と伝え合うことで，自分の気付かなかったことも含めて，次の活動への意欲につなげられるようにする。	●地域の図書館に関心をもち，本を読んだり，探したり，借りたりして，正しく安全に利用しようとしている。［関・意・態］ ●図書館や本が，みんなで使うものであることについて考え，友達と話し合っている。［思考・表現］ ●図書館には，みんなが気持ちよく利用するためのルールやマナーがあることに気付いている。〔気付き〕
4	**乗り物を使っていこう。** ○図書館の職員や駅の職員などとかかわることを通して，それぞれの思いや工夫に気付くとともに，安全に気をつけて，正しく，大切に利用したいという思いをもち，それを自分なりに表現することができる。	①② **（本時）** 交通機関に乗って図書館にいくための計画を立てる。 ③ 交通機関を使って，図書館などの公共施設に行く。（かもめ図書館） ④ 気付いたことや自分の思いを，記録カードや新聞など，適切な方法で表現する。	・ 前回借りた本を返すことをきっかけとするなどして，再度図書館を訪れることへの意欲化を図る。 ・ 前回の活動で分からなかったことや疑問に思ったこと，さらに知りたいことなどをインタビューするようにする。 ・ インタビューや利用して分かったことなどを，分かりやすく，工夫してまとめられるよう，記録カードや模造紙などを準備しておく。 ・ 帰校時のうがい，手洗いなど，衛生面の指導を徹底する。	●図書館や駅（電車）の利用者や支えている人々と，適切なあいさつや言葉遣いをしながらかかわったり，図書館や駅（電車）に親しみや愛着をもち，大切にしたりしようとしている。［関・意・態］ ●図書館や駅（電車）を支えている人がいることや，みんなが気持ちよく利用できるような施設の工夫について考え，友達と話し合ったり，記録カードにかいたりしている。［思考・表現］ ●図書館や駅（電車）には，施設を支えている人がいることが分かるとともに，図書館や駅（電車）を利用すると，自分たちの生活が楽しく豊かになることに気付いている。〔気づき〕
2	**何回もつかって みよう** ○身近な公共施設を	① 身近な公共施設を繰り返し利用する。 ② 利用したり，人々と	・ 授業以外で，友達や家の人と公共施設を利用したときのことを，朝の会の話や掲示コーナーを設ける	●公共施設や，それを支えている人に関心をもち，安全に気をつけて正しく利用しようとしている。

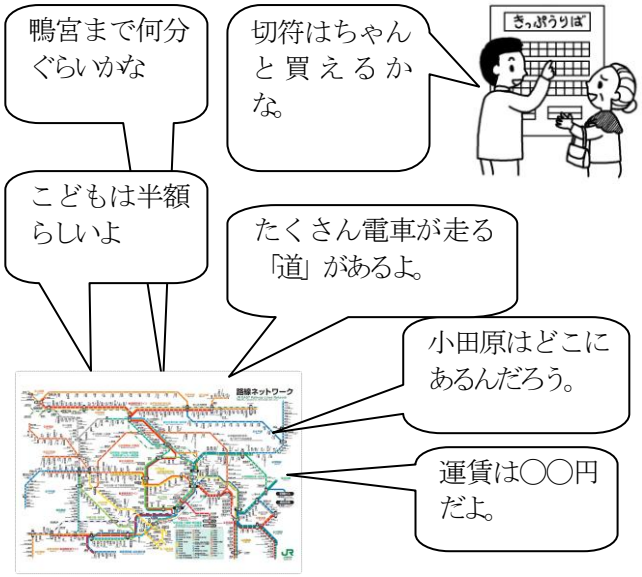
	繰り返し利用しながら，その場所に愛着をもち，それを支えている人々がいることに気付くとともに，安全に気をつけながら，正しく大切に利用することができる。	かかわったりして気付いたことを，記録カードにかきためたり，話したりするなどして，伝え合う。	などして，伝え合えるようにする。	［関・意・態］ ●公共施設がみんなで使うものであることや，それを支えている人々について考え，友達と伝え合っている。 ［思考・表現］ ●公共施設には，みんなが気持ちよく利用するためのルールやマナーがあることや，施設を支えている人がいることに気付いている。 （気づき］
2	**かかわりを通してわかったことを発表しよう**	①身近な公共施設や公共交通機関を利用しての気づきや感想をグループで伝えあう。 ②たんけん発表会を開く。	・ **公共交通機関を利用していった場所で働く人々との関わりからわかったことをまとめる。また、公共交通機関を利用する際に気づいたことも表現できるように支援する。** ・ **お世話になった人々に感謝の気持ちを表せるような機会や場を設定する。**	**・まちでかかわった人や公共物などのよさを，「まちのすてき」として進んで伝えようとしている。** **［関・意・態］** **・まちでかかわった人や公共物などの様子を，調べてきたことを使って分かりやすく伝えている。［思考・表現］** **・自分がくらしているまちには，すてきな人や場所がたくさんあることに気付いている。**〔気づき〕

5．本時について

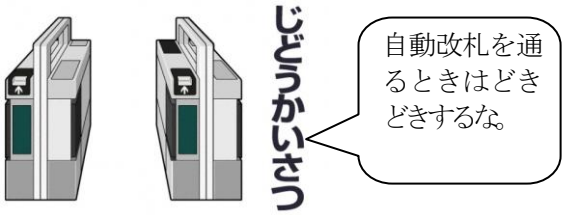
（1）本時目標（6／12）

「かもめ図書館に行く方法を考え、計画を立てる。」

学習活動	指導上の支援・留意点・評価（◇）
1.　自分たちだけで電車に乗って、かもめ図書館へ行くことを知る。 かもめ図書かんに行くけいかくを立てよう！ 「かもめ図書館」 ・いったことあるよ ・市立図書館よりも大きい図書館だって行っていたよ。	・　かもめ図書館までの行き方や駅の使い方で知っていることを発表させて，わかっていることとわかっていないことを整理しながら，板書する。
2.　かもめ図書館までの行き方を考える。  トイレはどこにあるのかな。 小田原駅の中はとっても広いね 切符を売っている場所はどこかな。 何番線に乗ればいいのかな 電車に乗っていくんだよね。	・　友だちの発表をしっかり聞かせ，駅や電車の様子の具体的なイメージがもてるようにする。 ・　友だちの発表をしっかり聞かせ，駅や電車の様子の具体的なイメージがもてるようにする。 ・　切符の買い方や乗り換えの仕方について具体的にイメージがもてるように働きかけをする。 ・　話し合いの中で，駅のホームや道路での安全に対する配慮が足りない場合は，子どもたちに問い返し，これまでの体験をもとに考えさせるようにす



3.　わからないことや不安に思っていること、楽しみにしていることをカードに書く。



4.　次時に計画を立てることを確認する。

る。

・　学校から小田原駅までのことを気付かせるために地図を準備し，常時見える場所に掲示しておく。

・　探検に向けてわからないことや，不安なことを解決する方法をみんなで考え，電車にのって行きたいという気持ちがもてるようにする。

【関心・意欲・態度】

・　かもめ図書館までの行き方や駅の使い方等，知っていることを進んで発表しようとする。（つぶやき・発表・行動）

【思考・表現】

・　行く方法を考えることができる。・ルールやマナーについて考えたことを発表できる。（発表・行動・カード）

【関心・意欲・態度】

・　自分たちで電車にのることを楽しみにして，行く方法を調べようとしている。（行動・発表・カード）

6　実践を終えて

（1）子どもとともにつくる学習展開

小田原の城下町である三の丸小学校区は，たくさんの魅力的なもの・人・場所にあふれている。子どもたちの遊び場の中に，城址公園・御幸が浜・南町の寺院・狭い路地・小田原駅などがあり，この町ならではの魅力が身近で，生活に密着している。しかし，子どもたちの遊びの中だけで，町の良さ・誇りとして町の魅力をとらえることは難しい。そこで，２年生活科の町探検の単元では，自らの足で探検し，さまざまなもの・人・場所に出会いながら町の良さや自慢を発見・発信する中で，町の良さに気付き，親しみ・愛着を持つ姿を願い学習の計画を立てた。まず、春の町探検では，自分が住んでいる町のひみつについてクラスの子どもに紹介した。その後，友だちの紹介を聞いて自分が実際にその場所に行って確かめたいひみつをもとに，各方面へ探検にもう一回出向いた。二回目の探検によって、同じ学区なのに自分の住んでいる町とは全く雰囲気が異なることに驚いたり，普段自分が住んでいる町に関して，違う子どもの発表を聞くことによって新たな発見をすることができたり，探検して発見したことを発表し合うことで，新たなことに気付くことができたりした子どもが多くいた。そして，春の町探検の気づきを受けて，「もっと遠くへ行ってみたい。」「〇〇にいってみたい。」「もっと調べてみたい。」「もっと話を聞きたい。」という思いや願いをもった。そこでその思いや願いを実現するために、前単元の「動くおもちゃ作り」の活動で「おもちゃの作り方を調べたい。」という願いをもたせ、おもちゃの作り方を調べるために図書館にいって調べてみようというように、急に図書館に行くのではなく、自然な流れで図書館に行けるようにした。そして、図書館で自分の利用者カードを作り、カードの裏に書いてある別の図書館の名前から市立図書館以外の存在に子どもたちが気づくようにした。そしてそこまで行くために利用するであろう公共交通施設に目を向けさせ、「もっと遠くへ行ってみたい。」という子どもたちの思いや願いを大事にできると考えた。

そのためには子どもたちの目線をまず，学区から学区外へ広げることが必要になってくる。そして子ども

自ら計画を立て，公共施設と何度もかかわる活動をする必要があった。そこで単元のはじめに、学校から歩いて五分とかからない、学区内の市立図書館に何回も通い、本を借りる活動を行った。そして本を借りるための図書カードに注目し、カードに書いてある近郊の「かもめ図書館」に着目し、かもめ図書館まで行くための子どもの追求意欲を刺激するためにきっかけ作りを工夫した。市立図書館の職員の皆さんに協力してもらい、利用者カードを使って、市立図書館以外にもかもめ図書館でも使えること。かもめ図書館は市立図書館よりも規模が違うという二点を話してもらった。協力のおかげで、子どもたちの町探検の視点を、公共施設（かもめ図書館）やそこに行くための電車などの公共交通機関に絞ることが出来た。ただ、その際、児童は電車などの公共交通機関をあまり利用していないことに気づいた。

そこで、公共交通機関を使って小田原市で一番大きい図書館であるかもめ図書館にいく活動を通して，公共施設だけでなく、公共交通機関にも親しみを抱いて生活を工夫したり楽しくしたりしようとする意欲を喚起できるのではないかと考え、単元計画を軌道修正した。さらに，公共施設を公共交通機関で探検し，人や場所とかかわる体験を繰り返すことで、体験からの気付きから、自分の思いがさらに深まるのではないか。そしてその思いが地域に対する愛着につながるのではないかと考え、活動計画を立てたのが本時である。

（2）成果と課題

本時の課題は「かもめ図書館に行く方法を考え、計画を立てる。」である。そこで、かもめ図書館まで行くための子どもの追求意欲を刺激するためにきっかけ作りを工夫した。今回は時刻表を用意したり、電車やバスの話を生活科以外の場面でも話に出したりした。わくわくハイクが終わったすぐ後の時期だったこともあり、交通機関の話がしやすい雰囲気がクラス内にもあり、計画を立てやすかった。

また、探検するにあたり、安全面に考慮する必要があった。かもめ図書館は電車やバスで行かないといけないが、グループでの活動を考えていたので、探検の際はグループの人数分の「付き添いボランティア」が必要となってくる。今回は保護者の皆さんが大変協力的で助かった部分もある。課題として、特に公共交通機関に乗る場合の安全確保の再確認が上げられるが、指導要領にも公共機関を利用することを推奨しているので、正直難しい課題となった。

（3）成果と課題

本時の課題が切実な課題かというと、実際「付き添いボランティアとして保護者がきてくれる児童」と「班長」には特に切実だったように感じた。前者は「保護者」の視線が感じられるからであって、本時の狙いとは関係ないが、後者の「班長」はリーダーとしてという使命感も加わっていたからだと思う。これは毎日の学習活動で、「班長」の役割について「みんなをまとめる。」ことだと耳がたこになるくらい話をしていたので、学区外に出かけるという、子どもたちにとって普段ない「ミッション」であることが使命感としてプラスに働いたのだと思う。また、この単元に対しての緊張感があまり感じられない雰囲気の子どもには「先生やボランティアの人は、君たちがピンチの時に助けるだけで、時間の計画を立てて、場所も決めていくのは君たちなんだよ。ワクワクハイクと似たようなことだと考えているけど、あれは 6 年生を中心に考えて決めているんだよ。先生方から決めたわけではないんだよ。」という少し厳しいなげかけをしてはじめて、計画を立てることの重大さに気がつくことがあった。

このことから、切実感をクラスの全体に持たせることは出来ず、限られた児童から雰囲気を感じ取って、結果、学習活動を行ったと思う。子どもたちの思いを一つにするための取り組みがたりなかったのもあるが、場所を限定することで、実際に「図書館」以外に行きたい児童には切実感を持つことが難しくなってしまったことが上げられる。安全面を考慮して、行く範囲を限定する必要があると考えたのだが、教師の適切な支援の重要性を感じた。

本時ではグループでの話し合いの場面で「ひびき合い」があると考えていた。なぜなら見取りとして、児童の実態から全体での話し合いからのひびき合いがまだ出来ないと考えていたからだ。ところが実際の授業では、班の意見を吸い上げて全体で話し合いをしている時の方が「ひびきあい」があったように感じた。これは子どもたちの中でイメージしやすい教材や周りに説明しやすい写真などの補助教材があったことで、いつもよりも自分の考えが話しやすかったからだと思う。具体的にはテレビに時刻表や券売機の写真を写した時に普段の児童とは違う反応があり、その後、全体に自分の考えを発表する姿は実に

堂々としたものだった。

　このことから、子どもたちが意欲を持って取り組むためのみとりが足りなかったと感じた。適切に支援するためには子どもがどんなところでひびきあえるのかを考えなければならない。本単元では，目的に合った撮影をすることを目標にデジタルカメラを探検の記録に活用し，まとめや交流のために活用することも当初は考えていた。だが、まだ低学年だからという理由で計画に取り込まなかった。今回の子どもの反応を見て、デジタルカメラで学習する楽しさを感じるだけでなく，自分たちの活動を容易に振り返ることができる有効な方法であることを知った。マスメディアの利用は副教材という観点からも大変有効であること。そして「ひびきあい」にとっても有効であることを感じた。低学年だからという観点ではなく、児童の実態を見とった単元計画を、この経験を元に今後は作っていきたい。